

臨戦態勢で生まれた城郭都市

文——伊東孝 Takashi Itoh ● 日本大学理工学部社会交通工学科 特任教授
写真——西山芳一 Hoichi Nishiyama ● 土木写真家

彦根城と城下のまちづくりが歴史の舞台に登場するのは、関ヶ原の合戦後のことである。

関ヶ原の合戦（一六〇〇年）で徳川軍の先鋒として活躍した井伊直政は、合戦の論功行賞により、石田三成の旧領であった湖北・湖南地方をあてがわれ、佐和山城に入城した。直政は、合戦で荒廃した城にかわってあらたな築城地を構想していたが、合戦で受けた鉄砲傷がもとで二年後になくなった。嫡男の直継は父の遺志を継いで、あたらしい城普請を計画した。松原内湖（後述）を挟む佐和山城の対岸に位置する彦根山が築城に適した地であることから、幕府に許可を得て城普請に着手した。彦根山には、平安時代から観音の霊驗所として都にまで知られていた彦根寺があったが、移転させられた。工事の完成には慶長八年（一六〇三）から元和八年（一六二二）まで約二十年間を要した。築城にあたり、幕府からは三名の奉行が派遣され、

近江周辺の七国（美濃・尾張・飛騨・越前・伊賀・伊勢・若狹）一二大名が動員された天下普請であった。

開始された築城工事だが、この時期はまだ大阪城に豊臣秀頼がいたので、彦根城は豊臣家に対する最前線基地として築かれ、いわば軍事的な臨戦態勢のもとでおこなわれた工事であった。

軍事施設計画という城の縄張りは、大きく彦根山の頂上部の山城部分と、山麓の内堀部分とから構成される。山頂部は二本の大堀切をつくって彦根山を三つに区分し、真ん中に本丸と西の丸、北に出曲輪と観音台、南に鐘の丸を配した。大堀切には橋がかけられていたが、いざというときは落橋すればよく、当初は引き込橋であったともいわれる。また山裾は全周にわたってほぼ垂直に削られていた。「切岸」である〔堀切〕「切岸」は、一月号の「鎌倉・宗教都市」という城塞都市」でも登場した。「堀切」は敵の尾根筋での動きを阻み、「切岸」は登攀攻撃を妨げる施設）彦根城の大堀切は、高石垣でつくられた。

最近の調査で明らかにされた彦根城の石垣の構造的な特徴が、二つある。一つは登り石垣であり、もう一つは鉢巻石垣と腰巻石垣である。登り石垣は、斜面に対して直角に築きあげられた石垣で、敵の斜面移動を封じる施設、彦根城には五カ所設けられた。鉢巻石垣と腰巻石垣は、鉢巻石垣が土塁の天端部に設けられる石垣であ

内堀の腰巻石垣

表御殿（現、彦根城博物館）前にある腰巻石垣で、高さ2 m、長さ131 m。写真右の隅角部は算木積み（直方体石材の長辺と短辺を交互に積み上げる工法）。奥に平成16年に復元された表門橋が見える。



天秤橋と大堀切

天秤のように見えることから呼び名がついた。両側の高石垣の間が大堀切。奥が本丸、手前右側が鐘の丸。





彦根士族屋敷図 (1735~1751年頃)

城を中心に3重にめぐる堀や大きな松原内湖の存在が描かれ、城下町全体の様子がわかる。本丸上側の敷地(「御庭」)が玄宮園と楽々園、図面右斜め上側方向が佐和山城、左の水色は琵琶湖。(『彦根の歴史』より転写)



左／七曲り仏壇街

寛永末年から正保年間(1643~47)にかけて形成された街区で、屈曲した道沿いに展開したことから七曲りと呼ばれる。仏壇製造業が起こり、今日の彦根の地場産業へと発展している。

右／下魚屋町の町並みと卯建のある長屋

下魚屋町は、内町の町の中では本町とならび、最初期に開発された。開発当初は、佐和山城下からの移住者で占められた。名称は、魚売り商人を集住させたことにちなむ。



天守

3階3重の天守で、屋根は切妻破風・入母屋破風・唐破風の3つの様式を採用、2階・3階には花頭窓を配するなど、変化に富んだ美をみせる。建物は、通し柱を用いずに各階ごとの積み上げ方式である。

るのに対し、腰巻石垣は土塁の基底部に築かれる石垣である。彦根城では、内堀の城内側に築かれた。このような石垣は石材の少ない東国地域特有の石垣で、江戸城や会津若松城などで採用されているが、西国では彦根城にしか見られないという(以上は『特別史跡彦根城跡 石垣総合調査報告書』平成二十二年による)。

城下町の建設も築城とともに始められ、城普請が終えるころにはほぼ主要な町割りが完成している。町割り造成は、彦根城東側の松原内湖(現在の総合運動場や高校などの用地)に流れ込んでいた芹川を西に振って琵琶湖へまっすぐに通し、城の周囲に内堀・中堀・外堀の三重の堀をめぐらした。外堀を境に、内側を内町、外側を外町と呼び、居住区域は、城下町での軍事的な配置や職人集団の掌握を考えて配置され、武士は身分格式や職分に応じて、町人は職種などに応じて定められた。各堀の城内側の橋の袂には番所が設けられた。

戦に備えてつくられた彦根城であったが、徳川幕府の長期安定政権が続いたおかげで戦を一度も経験していない。また江戸時代は、譜代大名の多くが昇進のため転封がおこなわれたが、幕府に重用された井伊氏は幕末に至るまで一度の所替えもおこなわれなかった。それゆえ町民の城主に対する信望も熱く、天守は町と町民のシンボルであった。明治維新で各地の城が破壊される中、地元住民は、明治十二年(一八七八)、

明治天皇が巡幸されたとき、天守や櫓の保存を請願した。参議大隈重信の進言などもあり、保存が受け入れられた。

空襲にも遭わなかったので、彦根には多くのものが残っていると期待できそうだが、時代の変化に抗することはむずかしい。東海道線が通り、戦後にはマリア対策として外堀の大半と玄宮園・楽々園に広がる湿地帯が埋め立てられ、公園や道路に利用された。高度経済成長期には彦根駅を中心に土地区画整理がおこなわれ、モーターゼーションにあわせて水路が道路にかわった。都市整備の進展とともに、残された外堀の水面も完全に消失した。とはいえ彦根には、城郭都市の遺構を数多く見ることができる。変化も大規模ではないので、江戸の古図をもって町中を歩けば、変わったところも比較的容易に確認できる。

暫定遺産一覧表では、以下の点を評価する。彦根城は十七世紀初頭の城郭建築最盛期の遺産であり、城郭建築と居館の庭園である楽々園および玄宮園が残り、二重の堀と石垣・城壁が良好に保存されている。城下町は、近代的な市街地に変わっているが、街路の形態などに城下町特有の地割が残っている。

参考文献

彦根城博物館編集『彦根の歴史ガイドブック』彦根市教育委員会、二〇〇一年
「彦根城と城下町」彦根市教育委員会提供資料